

臨床すべてに役立つ!
やっぱり頼れる看護専門情報誌
http://www.shorinsha.co.jp/

第32巻 第13号 通巻463号 2016年10月20日発行・発売 毎月1回20日発行・発売 昭和60年10月8日 第3種郵便物認可 ISSN0911-0194

11 2016
Vol.32 No.13
月号

エキスパートナース Expert Nurse

特集

防がなくてははいけない! 医療関連機器 圧迫創傷

Medical Device Related Pressure Ulcer
(MDRPU)

ベスト
プラクティス
発表!



特集

最新エビデンスに基づく:
今はこうする!
患者の睡眠ケア
Q&A



特大フロクつき!



ピンクリボンウォーク 2016

認定 NPO 法人乳房健康研究会は 2000 年に発足して以降 (2003 年に NPO 法人化)、ピンクリボンウォークやピンクリボンアドバイザー認定、企業とのタイアップによるキャンペーン活動など、さまざまな活動に取り組んでいます。

もっと早い段階で病院に来てくれたら……

——研究会が発足したきっかけを教えてください。

島田 1994 年頃の話になりますが、私は大都会東京のまさにど真ん中の病院で乳腺の専門外来をしていました。その頃は乳がんの初期で病院に来る人、または症状がない段階で検診に来る人はとても少なく、もっと早く来てくれたら…と、私自身もどかしい思いがありました。その後アメリカに留学すると、そこはむしろ健康意識も薄い田舎の大学病院でしたが、医療のレベルは日本とそう違わないのに、患者さんたちの病気の知識や予防に対する意識、乳がん検診の普及率がとても高い。そこで私はカルチャーショックを受けて、これは日本でもなんとかしなければと思い、帰国後には、病院に来る前の一般女性の認識を変えるためのアクションを起こそうと活動を始めました。

高木 ちょうど同じ頃、日本国内でも乳がん検診の普及啓発を求める機運が高まっていました。医療者が病院の中で待っているだけでは助かる命も助けられない、もっと外に出ていかなければいけない、と。そこで帰国された島田先生にお声かけして、研究会の活動がスタートしました。

気づいたら「乳がん検診」の情報がすぐそばに、を目標に

——具体的にはどのような活動をスタートされたのですか？

島田 まずは、病気にかかる前段階の人にアプローチし、認識を高めることが重要と考えました。何かを意識するようになるためには、知らないうちに自然と刷り込まれていくということが大切です。小さい頃から、家庭や幼稚園、教育現場などで、たまたま手にしたおやつに何か書いてあるとか、町中を走るバスにポスターが貼ってあるとか、日常生活のなかに情報がただよっている状態を目指そうと。アメリカを参考に、企業ともコラボレーションして PR を始めました。

高木 アメリカをお手本に、まずはピンクリボンを知ってもらうことを念頭に置きました。「がん」と口にするのはこわいけど、ピンクリボンはかわいいよねというところから、話題に上るような仕掛けをつくっていったんです。またそれに加えて、ドクターが持っている症例やデータ、海外の情報などのコンテンツをメディアなどで積極的に発信していきました。

PR

乳がん検診のこと

女性の
11人に1人が
かかる病気



楽しみながら乳がん検診を知るーピンクリボンウォーク

——さまざまな取り組みが行われていますね。

高木 いちばん大きいのはピンクリボンウォークです。歴史も古く、2002 年にスタートして来年で 16 回目になります。

島田 講演会やセミナーもいいのですが、天気のいい休日に、わざわざ室内のイベントに、自分の時間を使って来るのはよほど熱心な人だけですね。でも、スポーツイベントであれば、乳がんについての特別の意識がなくても、男性も女性も、家族連れでも一緒に楽しめます。楽しそうなイベントだなと思って参加したところで、後から情報がついてくるというのは非常にユニークだと思い、アメリカの例を参考に、日本でもやってみようと考えました。

第 1 回の 2002 年の大会は、ウォークだけではなく「走るイベント」でした。トップでゴールしたランナーにインタビューしたところ、お母様が乳がんの患者さんだったから参加したというお話を披露してくださって、事務局メンバー全員が涙したという感動的なエピソードもあります。

身近な人が個別にサポートーピンクリボンアドバイザー

高木 2013 年からは、ピンクリボンアドバイザーの認定を行っています (<https://breastcare.jp/pinkribbon-a-exam/>)。

島田 その背景として、研究会が 2 年に 1 回行っている調査結果があります。研究会が発足した当時、乳がん検診の受診率はひと桁だったので、まずはその理由を探ることから始めたのです。すると、そもそも行く必要がないと思っている人、本当は行きたかったけど地理的・時間的な問題があって行けなかった人など、受診しない理由が明らかになってきま

知ってほしい

生涯に乳がんを患う日本人女性は、現在、11人に1人とされています¹⁾。厚生労働省の「人口動態統計」では、2014年の乳がんによる死亡数(女性)は13,240人となっています¹⁾。乳がんの早期発見、早期治療を目指して、乳がん検診の普及啓発活動に取り組んでいる認定NPO法人乳房健康研究会の活動について聞きました。

1) 国立がん研究センターがん対策情報センター「がん登録・統計」
http://ganjoho.jp/reg_stat/statistics/stat/summary.html

した。そして、身近な人から言われないと動かない人が一定数いるということもわかってきました(図1)。

一般市民向けの情報が普及して、乳がん検診の受診率は3~4割まで上がってきましたが、それをさらに上げるためには、大きな情報で流すのではなく、身近な人から伝えていく段階に来たということで、アドバイザーが誕生しました。

アドバイザーには看護師さんも多いです。それから、検診に携わっている診療放射線技師や臨床検査技師、予約受付の人たちもいます。制度の設立後、学会発表などでも、ピンクリボンアドバイザー資格を持った人が必ず検査説明を行うようにしているという発表があったりします。資格を取ること、自分の知識の裏づけが明確になり、自信をもって話せるようになったんだろうと思います。

高木 アドバイザーは医師ではないので、もちろん医療行為はできませんが、ゲートキーパーとして、正しい知識とハートを共有し、自分たちのやるべき範疇をしっかり理解したうえで、とても精力的に取り組んでくれています。

半数近くが身近な人にすすめられて受診

検診を受診している人では、半数近くが友人・知人や家族など、誰かのすすめがあったと回答。身近な人が検診をすすめることが検診受診のきっかけとなる。

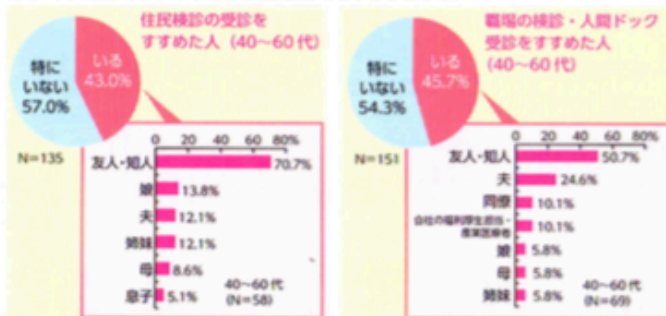


図1 乳がん検診をすすめた人の有無

認定NPO法人乳房健康研究会調査



認定NPO法人乳房健康研究会
副理事長
島田菜穂子先生



認定NPO法人乳房健康研究会
常務理事・事務長
高木富美子さん

頼られる存在の看護師として、自信を持って

——最後に、『エキスパートナース』の読者にメッセージをお願いします。

高木 実は看護職の方の乳がん検診受診率は決して高くはない、という問題があります(図2)。ぜひ、検診にも関心を持って、定期的な検診を継続してもらいたいですね。

そして、ピンクリボンアドバイザーの良きお手本として、ぜひ知恵と力を貸してほしいと思います。

島田 看護師さんは、病院の内外問わず、この人は看護師だと立場がわかった時点で、いろんな人から頼りにされる存在になります。そういうときに、自信を持ってこれが正しい情報だとアドバイスできるよう、ピンクリボンアドバイザーにチャレンジしてもらいたいと思います。日々の仕事に関係する知識の整理にもなりますし、自信にもなるので、領域にかかわらず、ぜひチャレンジしてもらえると嬉しいです。

(収録：2016年6月28日ピンクリボンプレストケアクリニック表参道にて)

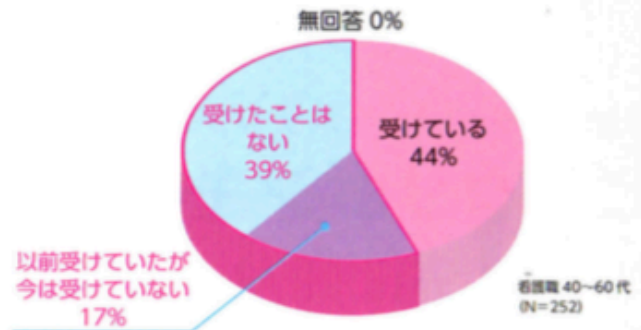


図2 看護師の乳がん検診受診率

認定NPO法人乳房健康研究会調査

研究会の活動には企業も協賛しています

スリーエム ジャパン株式会社では、ピンクリボン運動を支援しています。

2016年10月3日から11月30日までのキャンペーン期間中に販売した3MTM リットマンTM ステスコープ対象製品1器につき200円を認定NPO法人乳房健康研究会に寄付いたします。

次ページの広告もご覧ください。

